

# オルダス・ハックスレー

## 『クローム・イエロー』(翻訳④)

桑原 加代子

### 第15章

「愛すべきブラントーム<sup>1)</sup>の時代においては」と、スコーガン氏は話していた。「フランス宮廷に初めて伺候する女性は、王様から晩餐に招待されイタリア製のすばらしい銀のワイングラスでワインを賜わったものです。彼女たちの飲むグラスは普通のものではありませんでした。というのは、内側には生き生きとした一続きの愛の場面が極めて奇妙に巧みに彫られていました。若い女性が一口飲むたびに、彫刻の絵がだんだん見えてくる。だから廷臣たちはグラスに鼻を近づけるたびに減っていくワインから現われる絵を見て、女性が顔を赤らめるかどうか興味深く眺めるんですよ。もし彼女が顔を赤らめると、その無邪気さを笑い、もし表情を変えなければ、知り過ぎていると言って笑われるのです。」

「あなたは、その習慣をバッキンガム宮殿で復活すべきだと提案するおつもりなの？」とアンが尋ねた。

「そうではありません」と、スコーガン氏は言った。「私はただ、十六世紀の非常にあけっぴろげな習慣の一例として、このエピソードを言っただけです。十七、十八世紀、あるいは十五、十四世紀<sup>2)</sup>、そして、ハンムラビの時代から今まで、あらゆる時代の習慣が同じように楽しく、あけっぴろげだということを示すために、他のエピソードを示すことだってできますよ。同じような楽しいあけっぴろげさの特色を持っていないのは、今は亡き十九世紀の習慣だけです。これは驚くべき例外だ。しかも、故意に歴史を無視したのではないかと思わざるを得ないような態度で、十九世紀の人々は、その意味深長な恐るべき沈黙を、普通で自然で正しいと見なしてきたんだ。過去1500年あるいは2000年に渡る卒直さは、常規を逸した誤まったものだと考えられていたんだ。このことは興味深い現象です。」

「全くその通りだわ」と、メアリーは何か言おうとして興奮気味に息をはずませて言

った。

「ハブロック・エリス<sup>3)</sup>の言葉によると…」

スコーガン氏は、交通の流れを止める警官のように手を上げた。「知っています。彼の言ったことが私の次のポイントになるんです。即ち、反発の性質です。」

「ハブロック・エリスは…」

「その反発は——今世紀の始めより少し前だと言ってもいいと思いますが——反発は、前の時代とは違ったあけっぴろげさの方向に向かったのです。我々が戻ったのは、過去の楽しいあけっぴろげさではなく科学的なものでした。恋愛に関するあらゆる問題は、恐ろしいくらい真剣なものになったのです。真面目な若者は、公けの雑誌の中で性的問題は今後二度と再び笑いの種にはならないと発表し、大学の教授たちはぶ厚い本の中で性を無味乾燥なものだと分析しました。メアリーののような真面目な若い女性が、1860年代の若者たちを恋愛に関して無我夢中にさせたようなほんのわずかなことを、哲学的な冷静さで議論するのが習慣になってきた。これは確かに尊重すべきことです。しかし、<sup>4)</sup>と——スコーガン氏はため息をついた——「私としては、こういった熱心さにラブレー<sup>4)</sup>やチョーサー<sup>5)</sup>のようなもう少し楽しい精神も加えてもらいたいですね。」

「あなたの意見には絶対反対だわ」と、メアリーが言った。「性の問題は笑いごとではないのよ。真面目なものだわ。」

「おそらく」と、スコーガン氏は答えた、「おそらく僕は、猥褻な人間なんですよ。だってそれを全く真剣なものとして認めることはできないと告白せざるを得ないんですから。」

「でも…」と、メアリーは怒り始めた。彼女の顔は興奮して、まっ赤になった。両頬は大きな熟した桃のようだった。

「実際」とスコーガン氏は続けた。「私には性の問題は、永久に存在し続ける数少ない楽しい問題の一つのように思えるね。恋愛というものはたとえわずかにしろ、笑いと快楽が悲惨と苦痛に勝るものなんだよ。」

「そうは思わないわ」と、メアリーが言った。一瞬の沈黙があった。

アンは腕時計を見た。「もう八時十五分だわ」と言った。「アイヴァーは、いつ来るのかしら。」彼女はデッキチェアから立ち上りテラスの手すりにもたれかかって、谷と向こうの丘の方を眺めた。平らな夕陽の光のもとで、この土地の構造が明らかになった。深い影、それと対照的な明るい光が丘に新たな立体性を与えた。以前は気づかなかった表面の凹凸が、光と影のため際だっていた。草、穀物、樹の葉に複雑な影が斑点をつけていた。あらゆる物の表面は驚くほどの装飾を施されていた。

「見て！」と、アンが突然指さして言った。谷の向い側の尾根の頂上のところ、夕陽を受けてバラ色がかかった金色の砂煙が、地平線に沿って急速に走っていった。「アイヴ

アーだわ。あの速さで分かるわ。」

砂煙は、谷に下りて見えなくなった。アシカの声をした警笛が近づいて来るのが聞こえた。一分後、アイヴァーが屋敷のかどを回ってやって来た。彼の髪は風に波打っていた。皆を見ると笑った。

「アン」と、彼は叫び、彼女を抱きしめてメアリーを抱き、もう少しでスコーガン氏までも抱くところだった。「さあ、やって来ましたよ。物凄いスピードでやって来たんだ。」アイヴァーの語彙は豊かだったが、少々風変わりだった。「夕食には遅れていませんよね？」彼は手すりの上に乗って、そこに座り踵を蹴り上げた。片腕で大きな石の植木鉢を抱え、信頼した愛情を示すといった態度でその植木鉢の、堅い苔のはえた側面に頭をすり寄せた。彼の髪は茶色でウェーブがかかっていた。目はきらきらと光る薄い珍しい青色だった。頭は長く顔は細くて、どちらかと言えば長く、鷲鼻だった。年をとれば——もっとも年をとったアイヴァーを想像することはむづかしいが——アイアン・デューク<sup>6)</sup>のような物凄さを持つかもしれない。しかし、二十六才の現在では、人を引きつけるのは顔の構造ではなく表情だった。それは魅力的で、生き生きとして、微笑は知的な光のようだった。彼はいつも落ち着きなく忙しそうに動いていたが、そこには人を引きつける優雅さがあった。彼のほっそりした体は、尽きることのないエネルギーの泉で養われているようだった。

「いいえ、遅れてなんかいませんよ。」

「君は一つの問題に答えるのに丁度いい時に来たんですよ」と、スコーガン氏が言った。「我々は今、恋愛は真剣なものか、そうでないかを議論していたんですよ。君はどう思いますか？ 真剣なものですか？」

「真剣ですか？」と、アイヴァーは繰り返した。「もちろん、そうです。」

「それ御覧なさい」と、メアリーは勝ち誇ったように言った。

「では、どういう意味で真剣なんですか？」と、スコーガン氏が尋ねた。

「一つの仕事としてという意味です。僕たちは恋愛を決して飽きることなく続けることができるんですから。」

「なるほど」と、スコーガン氏は言った。「その通り。」

「僕たちはそれに専心することができます」と、アイヴァーは続けた。「いつも、そして、どこでもです。女性というものはいつも本当に不思議と同じです。姿が少し違うだけです。スペインでは」——と、彼は片方の手で豊かな曲線を描いてみせた——「階段で女性とすれ違うことはできません。イギリスでは」——と、人さし指の先を親指の先につけ手を下ろし、この円形を想像で円筒に伸した——「イギリスでは、女性は筒形です。しかしその感情は、いつも同じです。少くとも僕には、いつでもそう思えるんですがね。」

「それは面白いね。」と、スコーガン氏は言った。

## 第16章

女性たちが部屋を出ると、ポートワインが回された。スコーガン氏は、グラスに一杯つぐとデカンタを隣りに渡し、椅子に寄りかかって黙ってあたりを見まわした。会話は何の目的もなく彼の回りで、さざ波のように広がっていた。しかし、彼はそれを無視し一人何か楽しそうに微笑んでいた。ゴンボールドがその笑いに気づいた。

「何を笑っているんですか？」と、彼は尋ねた。

「このテーブルに座っている皆さんを見ていただけだよ」と、スコーガン氏は言った。

「そんなに面白いですか？」

「いや、少しも」と、スコーガン氏は丁寧に答えた。「ただ、私自身の想像が面白かっただけです。」

「どんな想像ですか？」

「想像の中で最も無意味で、月並みなものですよ。あなた方を一人ずつ眺めて、もしローマ皇帝のように振舞う機会を与えられたら、それぞれ皆さんが最初の六人の皇帝の内<sup>71</sup>の誰に似ているか、考えていたんですよ。ローマ皇帝というのは私の規準なんです」と、スコーガン氏は説明した。「彼らはいわば空間の中で動いている人間なんです。理論的結論にまで発達した人間だから、規準、標準として他に匹敵するものがない価値が生じるんです。私は、人に初めて会うとまず自分に問いかけてみるんだ、『ローマ皇帝の還境を与えられたら、どの皇帝にこの人は似るだろうか——ジュリアスカ、アウグストウスか、ティベリウスか、カリグラか、クラウディウスか、それともネロか?』とね。それぞれの性格の特徴や精神、感情的傾向、ちょっと風変わりな点を調べて、それらを千倍に拡大する。その結果、でてきたイメージが私にその人のローマ皇帝型を示してくれるんですよ。」

「では、あなた自身はどの皇帝に似ているんですか？」と、ゴンボールドが尋ねた。

「私は彼らの全てを潜在的に持っているんです」と、スコーガン氏は答えた。「全てが——ただし、クラウディウスは多分例外ですね。彼は、私の性格の中で発達させるには愚か過ぎるんだよ。ジュリアウスの勇気と強制力、アウグストウスの思慮、ティベリウスの好色さと残虐性、カリグラの愚かさ、ネロの芸術的才能と法外な虚栄心、これらの種は全て私の中に存在しているんです。機会さえ与えられれば、私は物凄い人間になったでしょうね。しかし、状況は私には不利でした。私は田舎の牧師館に生まれ育ち、ほんのわずかばかりの金を儲けるために全く無意味で大変な仕事をたくさんして、青年時代を過ごした。結果は今こうして、中年になって、つまらない人間になっているんです。」

しかし、これもいいでしょう。おそらく、デニスが花を咲かせて小ネロになれないとか、アイヴァーが潜在的にカリグラのままにいるというのと同じように、これもいいでしょう。そうです、この方がいいんだ。しかし、自由に何の束縛も受けずに、その潜在能力の全威力を発展させるチャンスがあった方が、見ものとしては面白かったでしょうね。彼らの顔面の痙攣や、ちょっとした欠点、悪徳が大きく膨らみ、芽を出し、残虐性、傲慢、猥褻、貧欲の大きく風変わりな花が咲くのを見れたら、楽しくて愉快だったでしょうね。ローマ皇帝的環境は、特別の食物と女王の巣が女王蜂を作るのと同じように、ローマ皇帝を生み出します。彼らは適当な食物を与えられれば必ず女王蜂になれるが、我々はその点においては蜂と違うんです。我々には、そういった確実性はありません。ローマ皇帝的環境に置かれた十人の男の内一人くらいは、気質の点においては善良か知的か偉大になれるでしょう。残りがローマ皇帝の花を咲かせても、彼だけは特別だということもある。七、八十年前、南イタリアのブルボン家の功績<sup>8)</sup>を読んだ単純な人々は、びっくりして、『十九世紀にこんなことが起きるなんて!』と叫びました。それから数年後驚くべき二十世紀において、コンゴやアマゾンの不幸な黒人たちがスティープン時代のイギリスの奴隷と同じように扱われているのを知って、我々はびっくりしたものです。今日では、我々はこんなことには驚きません。英国警備隊はアイルランドを攻撃し、ポーランドはシレジア人を虐待し、大胆なイタリアのファシストたちは彼らの可愛そうな同朋を虐殺している。我々はそれらを当然のことと見ている。戦争以来、我々は何事も不思議だとは思わない。我々がローマ皇帝的環境を作り、多くの小ローマ皇帝が生まれたんだ。これ以上に自然なことがあるでしょうか？」

スコーガン氏は、残っていたワインを飲み干し再びグラスを満たした。

「今この瞬間にだって」と、彼は続けた。「最も戦慄すべき惨事が世界の隅々で起きている。人々は押し潰され、深く切りつけられ、腹わたを取られ、ずたずたに切られている。その死体は腐り、目は他の部分と共に朽ちていく。苦痛と恐怖の叫び声が、毎秒1100フィートの速さで空中を走っている。三秒も走れば完全に聞こえなくなる。これらは残念な事実だ。しかし、それ故に我々が人生を楽しむことが、少なくなるのだろうか？とんでもない。確かに同情は感じる。我々は国民や個人の苦しみを自分自身のものとして想像してみて、彼らを可愛そうに思う。しかし結局、同情と想像は一体何なのか？我々が同情を感じる人間が感情的に近い存在でなければ、その同情には何の価値もない。いや、たとえ近かったとしてもあまり役に立たない。しかしいい点もあるんだ。というのは、もし我々が他人の苦しみを理解し感じるだけの、鮮明な想像力と繊細な同情心を持っていたら、我々は一瞬たりとも心の平静さを持ってないということになるんだからね。真に同情心に溢れた人種には、幸せの意味すら分からないだろう。しかし、幸いなことに前にも言ったように、我々は同情深い人種ではないんだ。戦争が始まったときには、

私は想像力と同情を通して肉体的に苦しんでいる人々に対して苦しみを感じていたと思うよ。しかし、一〜二ヵ月たったら、正直なところ苦しんでいなかったと告白せざるを得なかったんだ。しかし、私は他の人よりも旺盛な想像力を持っていると思っている。人間はいつも苦しむときは、一人だ。この事実は自分が苦しんでいる立場にあるときには、憂鬱なことだ。しかし、このことは世界中の残りの人が楽しむことを可能にするんだよ。」

沈黙があった。ヘンリー・ウィンブッシュは椅子を後ろに押した。

「そろそろ女性たちの仲間に入った方がいいと思うがね」と、彼は言った。

「僕もそう思います」と、アイヴァーはさっと立ち上って言った。スコーガン氏の方を見た。「幸いにも」と、彼は言った。「我々は快樂を共有することはできますからね。必ずしも一人で幸せを楽しむことを、強制されているわけではありませんよ。」

## 第17章

アイヴァーは、狂詩曲の最後の和音を元気よくバーンと叩いて手を下した。その勝ち誇ったような音には、七度の和音が左手の親指で第八度音と一緒に打たれた感じがしたが、全体としての音楽的效果は、はっきりと表われていた。全体としてよければ、些細なことは問題ではない。その上、あの七度の和音の暗示は間違いなく現代的だった。彼はくると振り向き、目の上にかかった髪を振り上げた。

「さあ」と、彼は言った。「これが精一杯です。」

賞賛と感謝のつぶやきが聞こえ、メアリーはその大きな陶器のような目を演奏者に向け、「すばらしいわ」と叫び、まるで息が詰まっていたかのように大きく息を吸った。

自然と幸運は、アイヴァー・ロンバードに最高の贈り物を与えるのに、互いにその技を競った。彼は財産を持ち、その上完全に独立していた。外見もよく、物腰も申し分なく魅力的で、いちいち思い出せないくらいの恋愛の勝利者だった。彼の教養は、その数と種類においては並外れていた。彼の声は生まれながら美しいテノールだった。輝くばかりの才気で、素直に音高くピアノを即興で演奏することができた。彼はアマチュアの霊媒であり、テレパシーの能力を持ち来世についてもかなりの知識を持っていた。物凄いスピードで韻文を書くことができた。象徴的な絵を描くのに派手な方法を用い、たとえその絵が少々下手でも色彩は華やかだった。アマチュア芝居が上手で、機会さえあれば料理にも非凡な才能を発揮した。わずかばかりのラテン語とほんの少しのギリシャ語を知っている点では、シェイクスピアに似ていた。彼のような頭の人間にとっては、教育は余計なもののように思えた。訓練は、彼の生来の素質を駄目にするだけだった。

「庭に出てみましょう」と、アイヴァーは提案した。「とてもステキな晩ですよ。」

「どうもありがとう」と、スコーガン氏は言った。「しかし、私としてはこの居心地のよいひじ掛け椅子で、じっとしている方がいいんですがね。」彼のパイプは彼が吸うたびにぶくぶくと泡立ち始めていた。彼は最高に幸せだった。

ヘンリー・ウィンブッシュも幸せだった。彼は、ちらっと鼻眼鏡越しにアイヴァーの方を見て、それから何も言わずに今一番気に入っている汚れた小さな十六世紀の会計簿に目を戻した。彼は自分自身の会計簿よりもファーディランド卿の会計簿の方に詳しくあった。

アイヴァーのもとに集まって外に出た一行は、アン、メアリー、デニス、そして意外にもジェニーだった。外は暖かく、暗く月は出ていなかった。一行はテラスを行ったり来たりし、アイヴァーはナポリの歌を歌った。『ストレット、ストレット<sup>11)</sup>』——もっと近く、近く——スペインの少女について来いと言っているようだった。あたりの空気が震え始めた。アイヴァーは、自分の腕をアンの腰に回し彼女の肩に頭を少し傾け、そのままの姿勢で歌を歌いながら歩き続けた。とてもくつろいで自然に見えた。デニスはどうして自分はそうしなかったのだろうと思った。彼はアイヴァーが嫌いだった。

「プールまで降りましょう」と、アイヴァーは言った。腰に回していた手を離し振り向いて、自分の小さな羊の群を導いた。一同は屋敷の横を通り、下の庭に続くイチイの木の間に入る入口まで歩いて行った。屋敷の急勾配の壁と背の高いイチイの木の間の道は、真暗な谷のようだった。右に下りる階段が、イチイの生垣の隙間にあった。先頭を歩いていたデニスは、用心深く手探りで進んだ。こんな暗いところでは、人間は大きく開いた断崖や恐ろしい釘の突き刺さった障害物に対して、馬鹿げた恐怖心を抱く。突然、デニスは後で「キャー」という叫び声を聞いた。それから、パシャッという平手打ちのような鋭い音が続き、「私帰るわ」というジェニーの声がした。彼女の調子ははっきりして、そう言ったときには、すでにもう暗闇の中に消えていた。それが何だったにせよ、その事件は終わった。デニスは進み始めた。後ろの方から、アイヴァーが静かに再び歌いだした。

『フェリスは恋の道より欲の道  
拒むのは、損  
ある日、シルバンドルから  
一回のキスで十三頭の羊をせしめた』

メロデイは衰え、それから再びくつろいだ倦怠感と共に高まった。暖かい暗闇が、彼らの回りで血液のように脈打っているようだった。

『翌日は新たな状況、  
羊飼いの方が得な取引』

「ここに階段がある」と、デニスは叫んだ。彼は仲間を危険から救った。次の瞬間には、一同はイチイの木の芝生の上にあった。ここの方が明るかった、いや、少なくとも分かる程度に暗くなかった。というのは、イチイの木の歩道は屋敷の風下の道よりも広かったから。上を見上げると高く黒い生垣の間から、一筋の空と星がいくつか見えた。

『男が女の方から…』

アイヴァーは歌い続けた。それから歌を止めて叫んだ。「走って降りてみよう。」そう言って全速力で見えない坂を歌を歌いながら降りて行った。

『羊一頭で三十回のキスをせしめたのだから』

皆、後に続いた。デニスは皆に、坂は急ですよ、首の骨を折るかもしれませんよ、と注意しながら一番後ろからついて行った。しかし無駄だった。彼らは一体どうしたんだろう？と思った。皆はチクマハッカを一服飲んだ小ネコのようにになっていた。彼自身も、自分の中で一種の小ネコ気分が戯れているのを感じた。しかし、それは彼の全ての感情と同じようにどちらかと言えば、理屈で考えた感情だった。子ネコ気分を実際に支配的に示すことを求めるものではなかった。

「気をつけて」と、彼はもう一度叫んだが、そう言ったか言わない内に、ドスン！という音が聞こえ、彼の目の前で何か重いものの落ちる音がした。それに続いて、苦しうに「フー」という大きく息を吸い込む音が聞こえ、さらに「ア、アー！」という声があった。デニスは嬉しかった。デニスは皆に言っていたのだ。それなのに皆聞いてくれなかったのだ。彼は目に見えない苦しんでいる人の方に向かって、坂を走って降りて行った。

メアリーは、暴走した蒸気機関車のように丘を駆け降りた。暗闇の中をこんな風に盲滅法に走るのは、とても気持ちよかった。彼女は止まれないと思った。しかし、地面は平らになっていたのでスピードは、自ずと落ちた。そして、突然誰かに捕まれ止められた。

「さあ」とアイヴァーは手をぎゅっと掴みながら言った。「捕まえたぞ、アン。」

彼女は逃げようとした。「アンじゃないわよ。メアリーよ。」

アイヴァーは、大声で楽しそうに笑いだした。「おやおや！」と、彼は叫んだ。「今夜

は、へまばかりだなあ。さっきはジェニーだったし。」彼はもう一度笑った。その笑いは、どこか楽しそうだったのでメアリーも思わず笑ってしまった。彼は摺んでいた腕を離そうとはしなかった。そして、何故か楽しそうで自然だったのでメアリーもこれ以上無理に逃れようとはしなかった。二人は腕を絡めながら、プールの横を歩いて歩いた。メアリーは、彼が自分の頭を彼女の肩に楽に乗せるには背が低すぎた。互いに軽く触れ合いながら、彼は彼女の濃くすべすべした髪の毛を自分の頬に擦りつけた。しばらくすると、彼は再び歌いだした。夜は彼の声に合わせて、甘く打ち震えた。歌い終わると、彼は彼女にキスをした。アンかメアリーか。メアリーかアンか。どちらでも大した違いはないようだった。細かい点はもちろん違いただろう。しかし、全体的効果は同じだった。結局のところ全体的なものが重要なことから。

デニス丘を降りて行った。

「怪我したんではありませんか？」と大声で聞いてみた。

「デニスなの？ 足首を怪我したのよ。それに膝も手も…滅茶苦茶だわ。」

「可愛そうに、アン」と、彼は言った。「でも、暗闇の中で丘を駆け降りの方が無茶ですよ」と、言わない訳にはいかなかった。

「まあ」と、涙声で腹立たしそうに言った。「もちろん、そうだわ。」

彼は草の上に彼女と並んで座り、彼女がいつもつけている香水の微かな甘い香りを吸っているのに気づいた。

「火をつけて」と、彼女は命令した。「傷が見たいの。」

彼はポケットの中を探りマッチを捜した。火はパッとついて穏やかになった。魔法のように小さな宇宙が作られた。色と形の世界——アンの顔、彼女のキラキラ光る洋服のオレンジ色、剥き出しの白い腕、緑の芝生——そして完全に真黒な暗闇。アンは手を出した。転んだために土がつき青くなっていた。そして二~三ヵ所、赤くすり傷があった。

「それほどひどくないわ」と、彼女は言った。しかし、デニスはとてもショックだった。そして、顔を上げた彼女のまつげに痛さのあまり思わず流した涙のあとを見たとき、デニスの感情は高まった。

彼は、ハンカチを出して手についた土を拭き始めた。火が消えた。もう一本つける必要はなかった。アンは、おとなしく心地よさそうにしていた。彼が手をきれいにして包帯をすると「ありがとう」と、彼女は言った。その声の調子には、彼に対する優越感を失い彼よりも自分の方が若く、子供のようになったと彼に感じさせる何かがあった。彼は自分がとてつもなく大きく、保護者のようになったと感じた。この感情があまりに強かったため、彼は本能的に彼女の方に手を回した。彼女はもたれ掛り、二人は黙って座っていた。その時下の方から、静かな暗闇を通して、低いがはっきりとしたアイヴァーの歌声が聞こえてきた。彼は途中で止めた歌の続きを歌っていた。

『翌日、フェリスの恋は募り  
羊飼いの気嫌を損ねないように  
男の方へ自分から  
一回のキスで羊三十頭を返した。』

長い間があった。三十回のキスを与えたり受けたりするのはと、思われるくらい長かった。それから再び歌が続いた。

『翌日、フェリスは上の空  
羊も猟犬も与えた。  
男がリジェットになら、ただで与えるような  
一回のキスの代金に対して。』

最後の部分は、誰にも乱されることのない沈黙の中に消えていった。

「どうですか、少しはよくなりましたか？」と、デニスやささやいた。「こんな風にしていて心地いいですか？」

彼女は両方の間にエエとうなずいた。

『一回のキスに羊三頭』羊、ふんわりとした羊——メー、メー、メー……？それとも羊飼いか？ そうだ、今デニスは自分が羊飼いだと思った。主人であり、保護者だった。勇気の波がワインのように、暖かく膨んだ。彼は振り向いて彼女の顔にキスした。最初は思いつくまま、それから次はもっとはつきり口に。

アンは頭をそむけた。そのため彼女の耳元と滑らかな首筋へのキスになった。「駄目よ」と彼女は抵抗した。「駄目よ、デニス。」

。「どうして、駄目なの？」

「友情が台無しになるわ。とても楽しかった友情が。」

「くだらない！」とデニスは言った。

彼女は説明しようとした。「あなたには分からないの？」と、彼女は言った。「こんなこと、離れ業じゃないわ。」それは本当だった。何故か彼女には、デニスが恋をしてもいい男には思えなかった。彼との間に恋愛関係の生じる可能性は考えられなかった。彼は若すぎた、とても……彼女は適当な形容詞を見つけることができなかったが、自分の気持ちは分かっていた。

「離れ業ではないんですか？」と、デニスは尋ねた。「それに、とても不適當な言葉ではありませんか。」

「だって、そうなんですもの。」

「では、もし僕がそう言ったら？」

「同じだわ。そうではないと言うわ。」

「あなたに言わせてみせますよ。」

「いいわ、デニス。でも他のときにしてね。中に入って足首をお湯につけなくては。腫れてきたんですもの。」

体のことを言われては、議論はこれ以上無理だった。デニスは不承不承立ち上り、彼女に手を貸して立たせた。彼女は注意深く歩いた。「あっ」と、彼女は立ち止まり彼の腕に寄り掛かった。

「背負ってあげましょう」と、デニスは言った。彼は今まで女性を背負おうとしたことはなかったが、映画では簡単な英雄的行為に思えた。

「あなたには、無理だわ」と、アンが言った。

「いや、できますよ。」彼はますます、大きく保護者のように感じた。「僕の首に腕を回して」と、彼は命じた。彼女はそうした。そして、彼はかがんで彼女の膝の下を持って、持ち上げた。おやまあ、何という重さだ！彼はよろめきながら坂を五歩上り、バランスを失いかけた。それで、その重荷をドスンと下に降ろさなければならなかった。

アンは、大笑いした。「だから言ったでしょデニス、あなたには無理だって。」

「いや、できる」と、デニスは確信なく言った。

「もう一度やってみる。」

「あなたがそう言ってくれるのは嬉しいけど、歩いた方がよさそうね。」彼女は彼の肩に手を置き、支えてもらってゆっくりと足をひきずりながら丘を上っていった。

「可愛そうなデニス！」と、彼女は繰り返してもう一度笑った。侮辱されて、彼は黙っていた。ほんの二分前、彼女を抱きしめキスしたなんて信じられなかった。本当に信じられない。あの時、彼女は無力な子供だったのに。今や彼女は自分の優越性を取り戻し、再び望んでも手に入らぬ難攻不落の遠い存在になってしまった。どうして、背負うなんて離れ業を愚かにも言ってしまったんだろう？すっかり意気消沈した気持ちで屋敷に着いた。

彼はアンを二階に連れて行き女中に預けると、再び居間に降りて行った。彼は皆が前と全く同じように座っているのを見て、びっくりした。彼は全てが全く違うことを期待していた。彼が出かけてから、かなりの時間が過ぎたように思えた。皆を見渡してみると皆、し～んとしているように思われた。スコーガン氏のパイプは、まだ音をたてていた。これが唯一の音だった。ヘンリー・ウィンプッシュは、まだ会計簿に夢中だった。彼はファーディナンド卿が牡蠣はRのつく月にしか食べない方がよいということを見無視して、夏中牡蠣を食べる習慣だったことを発見したところだった。

ゴンボールドは、鱧甲の眼鏡をかけて本を読んでいた。ジェニーは、例の赤いノートに何かを書いていた。プリシラは、暖炉の横に置いてあるお気に入りのひじ掛け椅子に座って、何枚かの絵を見ていた。一枚ずつ腕の長さにまで伸ばして、山のようなオレンジ色の頭を反らして、目を細めてじっと見ていた。彼女は薄い青緑色の洋服を着ていた。紫色の胸元にはダイヤモンドが光っていた。とても長いパイプが顔から突き出ている。たくさんのダイヤモンドが高く結いあげた髪に詰まっていた、彼女が動くたびにキラキラと輝いていた。アイヴァーの描いた絵だった——来世を恍惚状態で旅したときに描いた霊的生物のスケッチだった。一枚ずつ裏には説明書がついていた。『天使の肖像、1920年3月15日』、『精霊の戯れ、1919年12月3日』、『天上に旅する魂たち、1921年、5月21日』。表の絵を見る前に、彼女は絵をひっくり返してタイトルを見た。一生懸命努力しても、プリシラは今まで一度も幻を見ることはなかったし、霊と交信することもできなかった。彼女は、他人の経験を知ることだけで満足しなければならなかった。

「他の人たちはどうしたの？」と、彼女はデニスが部屋に入って来たとき顔を上げて尋ねた。

彼は説明した。アンは寝室に、アイヴァーとメアリーは、まだ庭にいた。彼は一冊本を選び、座り心地のよさそうな椅子に腰を下ろし、乱れた心の許す限り気を落ち着けて夕方の読書をしようとした。電気は穏やかに光り、絵を見ているプリシラの動き以外の音はなかった。皆じっと黙っていると、デニスは心の中でつぶやいた。皆、黙っている…

メアリーとアイヴァーが姿を現わしたのは、それから一時間近くたってからだった。

「月が出るのを待っていたんです」と、アイヴァーは言った。

「ギボス状の月<sup>12)</sup>だったわ」と、メアリーは説明した。とても専門的で科学的な言い方だった。

「下の庭で見るととてもきれいですよ！ 木も花の香りも星も…」アイヴァーは腕を振った。「それに月が出たときは、本当にきれいで思わず涙が出てきたよ。」彼はピアノの前に座りふたを開けた。

「流れ星がたくさん落ちたのよ」と、メアリーは聞いてくれそうな人に言った。「地球が流れ星の夕立にあっているかもしれないわ。七月と八月には…」

しかし、アイヴァーはもうキイを叩いていた。彼の曲は、庭や星、花の香り、昇る月に関してだった。そこにいなかったナイチンゲールまで加えた。メアリーは、口を少し開いてじっと見つめ聞いていた。他の人たちは、あまり迷惑という風もなく、それぞれの仕事をしていて、350年前の七月の丁度この日、ファーディナンド卿が七ダースの牡蠣を食べた。この事実を発見して、ヘンリー・ウィンブッシュはとても嬉しかった。彼は生まれつき信心深く、記念の祝宴を催すことに喜びを感じていた。七ダースの牡蠣を食

べた350年記念…夕食前に知っていたらと思った。シャンペンを注文したのに。

メアリーは寝室に行く前にアンのところに行った。彼女の部屋の灯は消えていたが、寝てはいなかった。

「どうして庭まで降りて来なかったの？」と、メアリーは尋ねた。

「転んで足首をひねったのよ。デニスが助けて中まで連れて来てくれたの。」

メアリーは、可愛そうに思った。その上、アンが来なかったことがそんな単純な理由だと知って、内心ほっとした。下の庭で、彼女は漠然とはしていたが疑っていた——何を疑っていたかは分からない。しかし突然、自分とアイヴァーが二人きりになったのは、どこか不自然のように思っていた。別に気にしていた訳ではなかった。しかし、八百長の犠牲になったのだったら嫌だった。

「明日には治るといいわね」と、彼女は言った。そしてアンが逃したあらゆるものに対して、同情した——庭、星、花の香り、地球が今受けている流れ星の夕立、月が昇ってくるころ、それがギボス状だったことに対して。それから、二人はとても楽しい話をした。何について？ あらゆるものについて。自然、芸術、科学、詩、星、心霊主義、男女の関係、音楽、宗教。アイヴァーは面白い人だと、思った。

二人の女性は、愛情を込めて別れた。

## 第18章

一番近いローマ・カトリック教会は、二十マイル離れたところにあった。アイヴァーは、礼拝に関しては几帳面な男で、早めに朝食にやって来て、十時十五分前には出発したいと車を玄関のところに来させるようにしていた。スマートで高価そうに見える車で、レモン色にエナメルが施されたエメラルド・グリーンの皮張だった。二人乗りだった——もっとも、ぎゅうぎゅう詰めにはすれば三人でも可能だが——そして、乗っているものは車の真中から優雅な十八世紀風のガラス張りのセダンに入って、風や埃、雨に当たることはなかった。

メアリーは、ローマ・カトリック教の礼拝には参加したことがなかったので、面白そうな経験だと思った。だから、車が中庭の大きな門を通過して行ったときには、車の座席に座っていた。アシカの警笛が、だんだん小さくなり行ってしまった。

クロームの教会では、ボディーム氏が『列王紀六章十八節』について説教していた。『宮の内側の香柏の板は、ひさごの形を浮き彫りにしたもので』<sup>13)</sup>——直接この地方に興味のある説教だった。二年前からクロームでは、戦争記念物の問題が、こうしたことを考えるほどの余裕かエネルギー、団結心を持った人々の頭の中を占めていた。ヘンリー・ウィンプッシュは終始一貫して、地方の文献を集めた図書館の設立を訴えていた——州

の歴史、この地方の古い地図や遺跡に関する学術論文、方言辞典、この地方の地質学や博物学の手引書などの入った図書館。彼は村の人々がこういった読み物に刺激されて、日曜日の午後、化石や火打ち石の鋏を採集会を開くことを考えると嬉しかった。村の人々は、記念貯水池や上水道を作ることに賛成していた。しかし、最も熱心ではっきりとした考えの人々は、ボディウム氏の何か宗教的性質のもの——例えば、第二の墓地入口の門とか、ステンドグラスの窓、あるいは大理石の記念碑とか、あるいは、もし可能なら三つともという意見に従っていた。しかし、今までのところ何も行われていなかった。というのは、記念物設置委員会が同意していなかったことや、提案された計画を実行するには寄付金が少な過ぎるといふ極めて的を得た理由からであった。二ヵ月か、三ヵ月に一度、ボディウム氏はこの問題についての説教をした。このあいだは、三月だった。信者の記憶を新たにするぎりぎりのときだった。

『宮の内側の香柏の板は、ひさごの形を浮き彫りにしたもので』

ボディウム氏は、ソロモンの神殿について少し話をした。それから、一般的な神殿や教会の話をした。神に捧げられたこういった建物の特徴は何か？ 人間の立場から考えれば、明らかに全く役に立たないものである。それらはひさごの形を浮彫りにした非実用的な建物である。ソロモンは図書館を建ててもよかったかもしれない——本当のところ、世界一の賢者の趣味にこれほど、相応しいものがあるだろうか？ 彼は貯水池を掘ってもよかったかもしれない——エルサレムのような乾いた都市においてこれ以上役に立つものがあるだろうか？ 彼はどちらもしなかった。彼は、役に立たない非実用的なひさごの形を浮き彫りにしたものを建てた。何故か？ 何故なら、彼は、それを神に捧げたからである。クロームには、戦争記念物についていろいろな議論があった。戦争記念物は、その性質上神に捧げられたものである。それは、頂点に達していた世界戦争の第一段階が正義の勝利の栄冠を得た感謝の印である。同時に、最終的な平和をもたらす主の出現を、神が延期されないようにという目に見える具体的な願いである。図書館か、それとも貯水池か？ ボディウム氏は、軽蔑と憤慨を込めてこういった考えを非難した。これらは、神に対してではなく人間のためのものである。戦争記念物としては、それらは全く相応しくない。墓地門が提案された。これは、戦争記念の定義に完全に合うものだった。すなわち、神に捧げる役に立たないものである。墓地の門は、すでに一つあった。しかし、墓地に入る第二の入口を作ることほど簡単なことは他にはない。そして第二の入口には、第二の門が必要である。他の案も出された。ステンドグラスの窓、大理石の記念碑。両方とも立派だ、特に後者は、戦争記念物を作るのには、一番いい時期だ。遅すぎることになるかもしれない。いつ何時、夜の盗人のように、神が来るかもしれない。一方、問題があった。資金が足らなかった。全ての人が、その財力に応じて寄付すべきである。戦争で肉親を失った人は、もしその肉親が自分の国で死んだ場合葬儀料と

して支払わなければならないと思われると同じ金額を、寄付することが期待されるであろう。これ以上の遅れは、罪悪である。戦争記念物は、すぐに作らなければならない。彼は、聴衆の愛国心とキリスト教精神に訴えた。

ヘンリー・ウィンブッシュは、もし戦争記念図書館が設立されたらどんな本を寄付しようかと考えながら家路に着いた。彼は、畑に通じる路を通った。道路より、こちらの方が気持ちよかった。最初の踏み段のところに、イギリスの日曜日と休日を葬式のようにしてしまう、全く似あわない黒い服を着た野暮な村の男の子の団が集まってたばこを吸いながら、げらげら馬鹿笑いをしていた。彼らはヘンリー・ウィンブッシュに道を開け、彼が通り過ぎるとき自分たちの帽子にちょっと手を触れた。彼は、少年たちに挨拶を返した。彼の山高帽子と顔は、静かな威厳において一つだった。

ファーディナンド卿の時代、またその息子ジュリアス卿の時代には、クローム、この人里離れた田舎のクロームでも、若者たちは自分なりの日曜日の娯楽を持っていただろう。アーチェリー、九柱戯<sup>14)</sup>、ダンス——意識的に社会の一員として参加した社会的娯楽を。今は、ボディラム氏のぞっとするような青年クラブと彼が時折開くダンスパーティとコンサート以外には何もない。こういった可愛そうな若者たちに、提供されるものは退屈か地方都市の都会的な楽しみのどちらかだった。田舎らしい娯楽は、もはやなかった。清教徒によって踏み潰されてしまった。

1600年度のアンニガムの日記の中に、非常に奇妙な一文があったのを、彼は思い出した。パーク州の清教徒の行政官がある怪聞を耳にした。ある夏の月夜、一行は武装隊を連れて出かけて行った。彼らは、山間の羊小屋の間で真裸で踊っている男女の団に出くわした。行政官と部下は、群衆の中に馬に乗って入って来た。何一つ身に付けていない哀れな人々は、武装した騎士に対してどれほど恥しく、無力に感じたことだろう！ 踊っていた人々は逮捕され鞭打たれ監獄に入れられ、晒しものにされた。月夜のダンスは、二度と行われなかった。古代からの気取らない牧神の儀式が、一体どれほどここで絶滅したことだろうか？と、彼は考えた。誰にも分からない——おそらく、彼らの祖先はアダムとイブの存在が考えられもしなかったずっと昔に、こんな風に月夜にダンスをしたのだろう。彼は、そう思いたかった。今はもう、そんなものはなかった。この退屈な若者たちは、もしダンスがしたければ、町まで六マイルも自転車を走らせなければならなかった。田舎はそれ自体の生活のない、個有の娯楽のない荒涼としたものになった。敬虔な行政官は、大古の昔から燃えていた小さな幸せの火を永遠に消してしまった。

『そして、トゥリアの墓石<sup>15)</sup>の上のように、一つの火が赤々と燃えていた、1500年変わることなく……』

彼はもう一度繰り返した。そして、殺された過去のことを考え、悲しくなった。

## 第19章

ヘンリー・ウィンプッシュの長い葉巻が、いい香りで燃えていた。膝の上には、『クロームの歴史』が置いてあった。彼は、ゆっくりとページを繰った。

「今夜は、どのエピソードを読もうかと思っているんです」と、彼は考え込むように言った。「ファーディナンド卿の航海も、面白くなくはないし、もちろん、その息子のジュリアス卿の話だって。自分の汗から、ハエが生まれるという妄想に苦しんだのは彼です。そして、そのため結局は自殺してしまいました。あるいは、シプリアン卿の話でもいいかな。」彼は、パラパラとページを繰った。「ヘンリー卿かな？ ジョージ卿かな… いや、どれも読みたくないなあ。」

「でも、何か読まなければいけないよ」と、スコーガン氏はパイプを口から出して言った。

「私の祖父についてにしようか」と、ヘンリー・ウィンプッシュは言った。「最後のファーディナンド卿の長女と結婚することになった事件なんだから。」

「いいね」と、スコーガン氏が言った。「さあ聞こう。」

「読む前に」と、ヘンリー・ウィンプッシュは本から顔を上げて、たった今鼻にかけたばかりの鼻眼鏡をとって言った——「その前に、ラピス家の最後のファーディナンド卿について、予備的なことを少し言っておかなければ。例の高潔で不幸なハーキュリーズ卿が亡くなって、ファーディナンドは、父の節制と儉約で少なからず殖えた財産を受け継いだが、すぐにそれを使う方に楽しく活用してしまった。四十才までに、財産の約半分を食べたり、飲んだり、恋愛に使った。そのため、もし、教区牧師の娘に結婚の申し込みをするほど夢中になっていなかったら、残りもすぐに同じようになくなってしまっていたことだろう。その若い娘は、結婚の申し込みを受け入れ、一年足らずでクローム屋敷と夫の絶対的な支配者になってしまった。ファーディナンド卿の性格に、著しい変化が現れた。生活は規則正しく儉約家となり、酒も控え、一度にワインを一本半以上あけることは、ほとんどなくなった。だんだん減っていたラピス家の財産は、不景気だったにもかかわらず、再び殖え始めた（というのは、ファーディナンド卿は、ナポレオン戦争の真<sup>16)</sup>最中の1809年に結婚したのだった）。子供たちの成長と幸せを眺め、裕福で落ち着いた老後を送り、先祖代々の墓に入るといのがファーディナンド卿の人も羨む運命のように思われた——というのは、ラピス卿夫人はすでに三人の娘をもうけており、これ以上娘や息子を持つべきではないと考える理由はなかった。しかし、神は他のことを意図していた。無限の災いを引き起こしていたナポレオンこそが、直接的ではないが、

この彼の改心した生活にピリオドを打つことになった時ならぬ非業の死の原因となった。」

「とりわけ愛国心の強かったファーディナンド卿は、フランスとの戦争直後から我軍の勝利を奇妙な方法で祝っていた。吉報がロンドンに届くと、彼はすぐに大量の酒を買い、最初にやって来た地方行きの駅馬車に飛び乗って、道から人々にそのニュースを伝え、宿ではその酒を振る舞い国中を走り回っていた。このようにして、ナイル河の戦いの後には遠くエジンバラまで行った。そして、その後勝利の月桂樹と喪の糸杉の花輪で飾られた駅馬車が、ネルソン提督の勝利と戦死の知らせを乗せて出発したときには、ノリッジ<sup>17)</sup>行きの「流星号」の御者台に乗り、両膝の上には船員用のラム酒の樽を、椅子の下には古いブランデーのケース二つを置いて、寒い十月の夜、一晚中座っていた。この楽しい習慣は、結婚を機に止めたことの一つだった。半島戦争の勝利、モスクワ撤退、ライプチヒの戦い、暴君ナポレオンの退位を祝うことはなかった。しかし、たまたま1815年の夏、ファーディナンド卿は数週間ロンドンで過ごした。ワートルローの輝かしい知らせが入った。ファーディナンド卿は、押さえ切れなかった。喜びに溢れた青春の思いが、再び彼の中で目覚めた。大急ぎで酒商人のところに行き、1760年もののワインを十二本買った。バス行きの駅馬車が発車するところだった。彼は、御者を買収して御者台を確保し意気揚々と御者の隣りに座り、コルシカ生れの無法者の没落を大声で叫び祝杯を振る舞った。アクスブリッジ<sup>18)</sup>、スラウ<sup>19)</sup>、メイドンヘッド<sup>20)</sup>を駆け抜けた。眠っていたレディング<sup>21)</sup>の町は、その大ニュースで起こされた。ディドコット<sup>22)</sup>では、馬丁は愛国心と1760年もののブランデーに圧倒されて、馬具を留め金に締めることができなかった。夜は次第に冷えてきて、ファーディナンド卿は行く先々の宿で一杯飲むだけでは十分でなくなった。そこで、暖まるためには宿と宿との間でも飲まざるを得なかった。彼らは、スウィンドン<sup>23)</sup>に近づいていた。馬車は、目が回るくらいのスピードを出していた——最後の三十分ではスピードは六マイルも出ている——そして、体がふらついていることを示す、ほんの微かの前触れもなくファーディナンド卿は突然椅子から傾き、真逆様に落ちてしまった。ガタンと不愉快に馬車が揺れ、眠っていた乗客は目を覚めた。馬車は止まった。車掌がランプを持って戻って行った。ファーディナンド卿は、まだ生きていたが意識はなく口から血が流れていた。馬車の後ろの車輪が彼の体を轢き、肋骨と腕の骨を折った。頭蓋骨も二カ所割れていた。彼らは彼を助け起こしたが、次の宿に着く前に亡くなってしまった。こうしてファーディナンド卿は、愛国心の犠牲者となって亡くなった。ラピス卿夫人は再婚せず、残りの人生を三人の娘——五才のジョージアナ、双子で二才のエミリーとキャロラインの幸せのために捧げようと決心した。

ヘンリー・ウィンブッシュは、一息つきもう一度鼻眼鏡をかけた。「前置きはこれくらいにして」と、彼は言った。「さあ、これで祖父の話を読み始められる。」

「ちょっと待ってくれ」と、スコーン氏が言った。「パイプにたばこを詰めかえるから。」  
ウィンブッシュ氏は待った。部屋の隅の方で一人離れて座っていたアイヴァーは、メアリーに霊界のスケッチを見せていた。二人は小声で話していた。

スコガン氏は、パイプに火をつけた。「さあ、どうぞ」と彼は言った。

ヘンリー・ウィンブッシュは始めた。

「祖父のジョージ・ウィンブッシュが、通称『ラピス家の美人三姉妹』と初めて知り合ったのは、1833年の春だった。彼は、そのとき二十二才の若者で黄色の巻き毛で、若く純真な心を示す、すべすべした淡紅色の顔をしていた。彼は、ハローとクライスト・チャーチ両校で教育を受け、狩猟やその他の野外スポーツを楽しみ、その環境は裕福といってもいいくらいだったが、彼の楽しみは控え目で無邪気だった。父親は東インドの商人で、将来息子を政治家にするつもりで彼の二十一才の誕生日の贈り物として、かなりの金を使ってコーンウォール州の小さな選挙区を手に入れた。ところが、ジョージが成人する前の晩、1832年の選挙法改正案がその選挙区をなくしてしまい、彼はすっかり怒ってしまった。ジョージの政治家としての出発は延期されなければならなかった。ラピス家の三姉妹と知り合いになったのは、彼が待機していたときで、とりわけいらいらしていた訳でもなかった。」

「美しいラピス家の娘たちは、彼の印象にとまった。長女のジョージアナは、黒の巻き毛、きらきらと輝く眸、高貴な鷲型の横顔、白鳥のような首、なだらかな肩をしており、東洋的で輝くばかりだった。そして、双子の方は、美しくしゃくれた鼻、青い目、栗色の髪で、瓜二つのうっとりするくらいの英国的美人だった。」

「しかし、初めて会ったときの彼女たちとの会話は、近より難しいものがあったので、もし彼女たちに打ち勝ち難い魅力がなければ、ジョージは交際を深める勇氣はなかったことだろう。双子の娘たちは、物憂げな高慢さで彼を見下すように最近のフランスの詩をどう思うかとか、<sup>24</sup> ジョルジュ・サンドの『アンディアナ』は好きかと尋ねた。しかし、最悪だったのはジョージアナが彼に対してした最初の質問だった。『音楽では』と、彼女は前屈みになり、大きく真黒な目でじっと見つめながら『あなたは、古典派、それとも超越派ですか？』と、尋ねた。ジョージは、心の平静を失わなかった。古典は嫌いだということを言えるくらいの、音楽の知識は持っていたので、自分の信用を高めるような敏速さで彼は、『僕は超越派です』と、答えた。ジョージアナは、魅力たっぷりに、にっこり微笑んだ。『嬉しいわ』と、彼女は言った。『私もそうなの。先週パガニーニをお聴きになりましたでしょう？「モーゼの祈り」——ああ！』彼女は目を閉じた。『あれ以上の超越的なもの御存知？』『いいえ』と、ジョージは言った。彼はちょっとためらい、話を続けようとしたがパガニーニの「農場描写曲」がとりわけよかったなどと、言わない方がいい——事実はそうだった——と思った。パガニーニは、バイオリンからロバの鳴き

声のような音や、鶏の声や、ブーブー、キーキー、ワンワン、ガーガー、モーモー、ガラガラといった音を出した。この最後の曲はコンサートの他の曲の退屈さを償ってくれたとジョージは思っていた。それを思い出して、彼はにやりとした。そうだ、間違いなく彼は音楽においては古典派ではない。徹底した超越派だった。」

「この最初の紹介に続いて、ジョージは、社交期のあいだパークレー広場の近くの、小さいが上品な家に滞在していた母娘を訪ねた。ラピス卿夫人は、二～三の控え目な質問をしジョージの経済状態、性格、そして家庭がかなりいいということが分かると、彼を食事に招待した。彼女は、娘たちが貴族と結婚することを望んでいたが、慎重な人だったので不測の事態に備えて準備をしておく方が賢明だと考えていた。ジョージ・ウィンプッシュは、双子のどちらかのための秀れた二番手と考えていた。」

「この最初の食事のとき、ジョージの相手はエミリーだった。二人は自然について話をした。エミリーは、自分にとって高い山は感動的で、人間的な都会の雑音は苦痛だと言った。ジョージも田舎の方がいいという点では賛成だったが、社交期のロンドンにも魅力があると言った。彼は、エミリーの食欲がなく、いや事実ないと言ってもいいくらいなのにびっくりして、同時に心配して心を痛めた。スープをスプーンに二杯、魚を一口、あとは鶏肉も牛肉も食わず、ブドウ三粒——これが彼女の食事の全てだった。ときどき、二人の姉の方を見た。ジョージアナとキャロラインも小食という点では同じようだった。彼女たちは、出されたものは何でも上品そうに嫌だという表情で避け、目を閉じ皿から顔をそむけ、レモンつきの平目魚や家鴨料理、仔牛の腰肉、菓子など、見るのも香りをかぐのも嫌だという具合だった。その日の食事はすばらしいと思っていたジョージは、思い切って姉妹たちの食欲不振について意見を述べた。」

「『食事の話はなさらないで』と、エミリーは弱々しい花のように首垂れて言った。『私たちは、ものを食べるということは下品で精神的ではないと思っています。人間は、ものを食べているときは精神のことは考えられないんですもの。』」

「ジョージは、その通りだと思った。『しかし、人間は生きなければなりません』と、彼は言った。」

「『ああ!』と、エミリーは、ため息をついた。『その通り、死はとても美しいとはお思いになりませんか?』彼女は、トーストの端をほんの少し切って気怠そうに噛り始めた。『でも、あなたのおっしゃる通り、人間は生きなければなりませんから…』彼女は、ちょっと諦めたという様子をした。『幸い、ほんの微かで人間は生きられますわ。』そう言って彼女は食べかけのトーストの端を皿に戻した。」

「ジョージは、びっくりして彼女を見つめた。青白い顔をしているが、とても健康そうだった。他の二人もそうだった。もしかしたら、本当に精神的であれば、あまり食物を必要としないのかもしれない。間違いなく、彼は精神的ではなかった。」

「その後、彼は何度も彼女たちと会った。ラピス卿夫人を始め、皆、彼に好意を抱いた。確かに彼は、ロマンティックでも詩的でもなかったが、気持ちのよい気取りのない、心の優しい若者だったので、誰もが好きにならざるを得なかった。彼の方でも、彼女たちを特にジョージアナを暖かく守ってあげようとする感情で包んだ。というのは、彼女たちには保護が必要だったから。彼女たちは、この世にいるにはあまりにもか細く、繊細過ぎた。彼女たちは、ほとんど食事もせず、いつも青白い顔をし、熱があると訴え、死について愛するように語り、よく失神した。中でもジョージアナが一番霊的で、一番食事の量も少なかった。一番よく失神し、死を口にし、一番青白かった——青白さは驚くほどで明らかに人工的に思えた。この物質世界に危なっかしく掴まっている手を緩めて、いつか霊になってしまうように思えた。このことは、ジョージにとって絶え間のない心配だった。もし、彼女が死んだら…」

「しかし、彼女は社交期の間どうにか生きていた。そして、妹二人と一緒に数多くの舞踏会とパーティに必ず出席した。七月の半ば、一家は田舎に引き上げた。ジョージは、八月をクロームで過ごすよう招待された。」

「ハウスパティーは、すばらしかった。招待された客のリストには、爵位を持った結婚適齢期の青年が二人いた。ジョージは、田舎の空気と休息、そして自然の環境で三人の娘たちが食欲とバラ色の頬を取り戻すかもしれないと思った。彼は間違っていた。というのは、最初の晩の夕食のとき、ジョージアナはオリーブを一つ、二～三の塩漬けの杏と桃を半分食べただけだった。彼女は、相変わらず青白い顔をしていた。彼女は食事の間中、愛について語った。」

「『真実の愛は』と、彼女は言った。『無限で永遠のものだから、永遠の世界でのみ完成されるのよ。アンディアナとロドルフ卿は、ナイアガラの滝に身を投げることで魂の神秘的な結婚を祝ったのよ。愛と死は両立しないわ。互いに愛し合っている二人の望みは、共に生きるのではなく共に死ぬことだわ。』」

「『まあ、まあ』と、太って実質的なラピス卿夫人は言った。『もし、世界中の人々があなたのような考えに基づいて振る舞ったら、次の世代は一体どうなるのかしら？』」

「『お母さま…』と、ジョージアナは抗議して目を伏せた。」

「『私の若い頃は』と、ラピス卿夫人は続けた。『もしそんなことを言ったら、大笑いされて面目を失ったわ。でも、私の若い頃は、今ほど魂は流行していなかったわ。それに私たちは、死をそれほど詩的には考えなかったわ。ただ不快なものだったわ。』」

「『お母さま…』と、エミリーとキャロラインが揃って懇願した。」

「『私の若い頃は——』ラピス卿夫人の特意の話題だった。どうやっても、もう止めることはできなかった。「私の若い頃は、もし食欲がなければ大黄を一服飲んだ方がいいと言っていたものだわ。今では…」」

「叫び声が上がった。ジョージアナが、ティンパニー卿の肩の上に倒れ失神した。必死の非常手段だった。しかし、成功だった。ラピス卿夫人は話を止めた。」

「大した事件もなく楽しい日々が過ぎた。楽しいパーティの中で、ジョージ一人が不幸だった。ティンパニー卿が、ジョージアナに結婚を申し込み受け入れられそうだった。ジョージは眺めるだけで、心は嫉妬と絶望の地獄だった。賑やかな若者たちと一緒にいることは、耐えられなくなってきた。皆から離れて、暗闇と孤独を求めた。ある朝、適当な口実を作って皆から離れ一人屋敷に戻った。若者たちは下のプールで水浴びをしていた。彼らの叫び声や笑い声が、彼のところにまで聞こえて、静かな屋敷は一層寂しく静かに感じられた。美しい姉妹たちと母親は、まだ寝室にいた。彼女たちは、たいてい昼食まで姿を現わさなかったので、男性たちは午前中はそれぞれ自由にしていた。ジョージは、広間に座り物思いに耽けた。」

「いつ何時、彼女たちは死ぬかもしれない、いつ何時彼女はティンパニー卿夫人になるかもしれない。嫌だ、嫌だった。もし彼女が死んだら自分も死のうと思った。墓場の向こうまで追い駆けて行こう。もし彼女がティンパニー卿夫人になったら…ああ その時は！ この解決策は簡単ではない。もしティンパニー卿夫人になったらと考えるだけで、ぞっとする。しかし、もし彼女がティンパニーに恋をしているとしたら——もっとも、ティンパニーに恋をする人間がいるなどとは信じられないが——もし彼女の命が、ティンパニー次第でティンパニーがいなくては生きていけないとしたら？ この手掛かりのない想像の迷路を辿っていると、時計が十二時を打った。最後の音が鳴ったとき、回転するぜんまい仕掛けの自動人形のように一人の女中が、カバーをかけた大きな盆を手に台所から広間に通じるドアから出てきた。ジョージは、座っていた大きなひじ掛け椅子から、ぼんやりとした好奇心で見っていた（彼自身は、見られずに。）彼女は小走りに部屋を横切り、ただ鏡が張ってあるだけのものの前で立ち止まった。彼女は手を伸ばした。すると、小さなドアが開いて螺旋階段の昇り口が表われた。ジョージはびっくりした。狭い入口を盆を持って入るために体を横向きにして、女中はカニのような格好でその中に飛び込んだ。ドアは、カチリと音をたてて閉まった。一分もするとドアが再び開き、今度は盆を持たないで女中が広間の方へ戻って台所へと消えて行った。ジョージは、再び物思いに耽けようとしたが押え難い好奇心が、彼の心をあの秘密のドアと階段と女中へと引きつけた。自分には関係ない、あの思いもかけないドアと奇妙な階段を探るのは許されない失礼と思慮を欠くことだと、自分に言い聞かせようとしたが無駄だった。全く無駄だった。五分間、英雄的に好奇心と戦った。しかし結局は、あの女中が入って行った何食わぬ顔をしている鏡の前に立っていた。一目見ただけで、秘密のドアの位置は分かった——秘密、それはうっかりしている人にとっては秘密というだけだった。鏡と同じ平面にある普通のドアだけだった。掛け金も取手もなく、ただ木の窪みにある小

さなつまみが親指を誘っていた。ジョージは、前にはそれに気づかなかったことに驚いた。今、一旦気づくと、例の偽りの書棚や偽せ物の本の並んでいる書斎の戸棚のドアと同じだった。彼は、掛け金を引っぱって中を覗いた。階段の段々は、石ではなく古い樫の木でできていて、螺旋状に上にあがっていてあとは見えなかった。細い窓から日の光が入っていた。彼は、中央の塔の下にいたのでその小さな窓は、テラスの上に開いていた。彼らはまだ、下のプールで大騒ぎしていた。」

「ジョージは、ドアを閉め椅子に戻った。しかし、彼の好奇心は満足しなかった。実際、中途半端な満足は余計その欲望をそそった。あの階段はどこに通じているのか？ あの女中の仕事は何なのか？ 自分には関係ないと繰り返した——無関係だ。本を読もうとしたが気が散った。時計が十二時十五分を打った。突然ジョージは立ち上り、部屋を横切り秘密のドアを開け階段を登り始めた。彼は、最初の窓を通り螺旋階段をぐるりと回り、次の窓までやって来た。彼は一瞬立ち止まり外を見た。心臓がまるで未知の危険に遭遇しているように、どきどきしていた。彼のしていることは、極端に非紳士的で、ひどく下品なことだと思った。爪先立ちで進んで行った。もう一度回って、それから半分回るとドアがあった。彼は、その前で立ち止まり聞き耳を立てた。何も聞こえなかった。鍵穴に目を当ててみたが、太陽の光を浴びている壁しか見えなかった。大胆になって取手を回し入って行った。そこで見たものに仰天して、口をぽかんと開けて立ち止まってしまった。」

「気持ちよく太陽の入っている小さな部屋の真中に——今、プリシラが居間として使っているあの部屋」と、ウィンブッシュ氏は注釈を加えた。「——小さな円形のマホガニーのテーブルがおいてあった。クリスタル、陶器、そして銀器が——全て優雅な食事の輝かしい道具が——きれいに磨かれたテーブルに影を映していた。真中の一番軟かいところまで切り込まれた大きなハム、茶色の砲弾のような冷たいスモモのプディング、細い白ワインの瓶、赤ワインの入ったデカンタが、この楽しい宴会の食事の上に並んでいた。そして、そのテーブルの回りに三人の姉妹、あの三人の美しいラピス姉妹が座り——食事をしていた！」

「ドアに向かって座っていた、ジョージアは大きく真黒な目でじっと見つめた。右手の親指と人さし指の間には、切り離れたチキンを一本持っていた。優雅に曲げられた小指は、他の指から離れていた。口は大きく開き、チキンの脚は口に入る途中で止まっていた。凍りついて宙に浮いていた。他の二人の妹たちも振り向いて侵入者を見た。キャロラインは、まだナイフとフォークを持っていた。エミリーの指は、ワイングラスを握っていた。とても長い時間に思えた。ジョージと三人の姉妹は、お互い黙って見つめ合っていた。彫像のようだった。それから突然、動きがあった。ジョージアナはチキンの脚を落とし、キャロラインのナイフとフォークは、皿の上に音をたてて落ちた。この

動きは広まり、もっとはっきりとしてきた。エミリーは立ち上がり叫び声を上げた。パニックの波はジョージのところまで届いた。彼は、くるりと振り向き訳の分からないことを呟きながら部屋を飛び出し、螺旋階段を下りた。玄関の広間にやって来て静かな屋敷に戻ると、一人笑い始めた。」

「昼食には、姉妹たちはいつもより少したくさん食べたようだった。ジョージアナは、フランス豆と仔牛の脚のジェリーを一杯食べた。『今日は少し調子がいいんです』と、この食欲を褒めたティンパニー卿に言い、『少し物質的ですわ』と、笑ってみせた。目を上げるとジョージの目と会った。さっと顔を赤らめ目をそらした。」

「その日の午後、庭で二人きりになった。」

「『ジョージ、誰にも言わないわね？ 誰にも言わないって約束して』と、彼女は懇願した。『とても滑稽に見えるわ。それに、食べるということは非精神的でしょ？ お願い、誰にも言わないって約束して。』」

「『言いますよ』と、ジョージは冷たく言った。『皆に言いますよ、もし…』」

「『ゆすりだわ』」

「『僕は構いません。二十四時間の猶予をあげますよ。』」

「ラピス卿夫人は、もちろんがっかりした。彼女はもっといいこと——ティンパニーと貴族の冠——を望んでいた。しかし、結局ジョージだって悪くはない。二人は新年に結婚した。」

「祖父は気の毒でした！」と、ウィンブッシュ氏は本を閉じ鼻眼鏡をはずしながら、つけ加えた。「圧迫された国民のことを新聞で読むといつも、彼のことを思い出します。」彼は、たばこに火をつけた。「高度に中央集権化された母親政治で、代議制度はなかった。」

ヘンリー・ウィンブッシュは、話を止めた。それに続く沈黙の中で、霊界のスケッチを説明するアイヴァーの声が聞こえた。居眠りをしていたプリシラが、突然目を覚した。

「何？」と、彼女は意識を取り戻した人のように、びっくりした調子で言った。「何？」ジェニーが、その声を捉えた。彼女は顔を上げにこりと笑い、安心させるように背いた。「ハムですわ」と、彼女は言った。

「ハムがどうしたの？」

「ヘンリーが読んでいた話ですよ。」彼女は膝の上の赤いノートを閉じて、ゴムバンドをした。「少し、休むわ」と、言い立ち上った。

「私も」と、アンは欠伸をしながら言った。しかし、ひじ掛け椅子から起き上がる気力がなかった。

その夜は、暑く不快だった。開け放した窓についているカーテンは、少しも動かなかった。アイヴァーは、自分で描いた星の世界のスケッチ画であおぎながら外の暗闇を見て、深呼吸した。

「羊毛みたいな空気だ」と、外の暗闇を見て彼は言った。

「真夜中過ぎれば、涼しくなりますよ」と、ヘンリー・ウィンブッシュは言い、そして、用心深く「多分」とつけ加えた。

「眠れそうにない。」

プリシラは、彼の方に顔を向けた。記念碑のような髪が、ほんのちょっとした動きにも揺れた。「努力しなければ駄目よ」と、彼女は言った。「私は眠れないときは、精神を集中させて、こう言うの、『私は眠る、私は眠っている！』ってね。そうしたら、ほら！眠ってしまう。これが精神力よ。」

「でも、それは蒸し暑い夜にでも、きくんですか？」と、アイヴァーは尋ねた。「僕は、蒸し暑い夜には眠れないんです。」

「私もよ」とメアリーは言った。「外なら別だけど。」

「外！いい考えだ！」結局、二人は塔の上で眠ることにした——メアリーは西の塔で、アイヴァーは東の塔で。それぞれの塔には、平らに鉛板を敷いたところがあって、天窓からマットスが出せた。星の下、ギボス状の月の下でなら、きっと眠れるだろう。マットレスが上げられシートと毛布が広げられ、一時間後、二人の不眠症患者はそれぞれの塔から、隔てた空間越しに大声でおやすみを叫びあった。

メアリーには、戸外での眠りを引き起こす魔法は予想ほど働かなかった。マットレスを通してさえ、鉛板はとても暑かった。それに色々な雑音があった。フクロウは、絶え間なく鳴いていたし、農場のガチョウは一度何かに脅えたように突然、気狂いのようにわめき始めた。星や月は見られることを求め、流れ星が空を走るときなどは、目を開けて次のを待たずにはいられなかった。時が過ぎ、月は高く昇った。メアリーは、屋根に上ったときよりも眠たくなかった。彼女は起き上り、欄干越しに向こうを見た。アイヴァーは眠ったのだろうか？と思った。すると、この彼女の頭の中の質問に答えるように向こうの屋根の組合わせ煙突の後ろから、白いものがそっと現われた——月の光で、それがアイヴァーだと分かった。両腕を綱渡りをするみたいに左右に広げて、屋敷の屋根づたいにこっちにやって来た。歩くとき、怖いほど揺れていた。メアリーは、じっと見つめていた。おそらく彼は眠りながら歩いているのだろう！もし突然目を覚したら！もし彼女が声をかけたり動いたりしたら死んでしまうかもしれない。これ以上見ていることもできず、枕に顔をうずめた。じっと耳を澄ましていた。とてつもなく長いと感じられたが、音はしなかった。まもなく、瓦を歩く音がして、それに続いて「畜生！」という声が聞こえた。それから突然、アイヴァーの頭と肩が欄干に現われた。それから片足、そしてもう一本の足。彼は鉛板の上にあった。メアリーは、びっくりして目を覚したふりをした。

「まあ！」と、彼女は言った。「何をしているの？」

「眠れないんだ」と、彼は説明した。「だから、君もそうじゃないかと思って来てみたんだ。たった一人で塔の上にいると退屈だよ。そうは思わないかい？」

五時前に明るくなった。長く細い雲が現われ、端はオレンジ色に染まった。空は青白く水のようにだった。苦痛の魂が悲しみにくれてすすり泣くように、大きな孔雀が下から飛び上り塔の欄干に止まった。アイヴァーとメアリーは、びっくりしてはつきりと目が覚めた。

「捕まえよう！」と、アイヴァーは起き上って言った。「羽を取ろう」びっくりした孔雀は、混乱してお辞儀をするように少し腰をかがめたり、上下に動いたり、泣き叫んだりしながら欄干の上を飛び跳ねた。長いしっぽは、向きを変えるたびに前後に揺れた。それから、パタパタ羽ばたくと空に浮かび、威厳を取り戻して東の方へと飛んで行った。しかし、記念品を残して行った。アイヴァーは、紫と緑と青と金のまつ毛のように長い羽を手に入れた。彼はメアリーに、それを渡した。

「天使の羽だよ」と彼は言った。

メアリーは、真面目な顔でじっとそれを見た。彼女の紫色のパジャマはたっぷりしていたので、体の線は隠れていた。彼女は何か大きく居心地のよい継ぎ目のない、一種のテディベアのぬいぐるみのように見えた——しかし、天使の顔と血色のよい口、金の鈴のような髪をしたぬいぐるみだった。天使の顔、天使の翼の羽… 今日の日出の様子は、何故かとても天使のように清らかだった。

「性の選択を考えると、とても不思議ね」と、彼女はやっと、魔法の羽をじっと見つめていたのを止めて言った。

「不思議です！」と、アイヴァーは繰り返した。「僕は君を選び、君は僕を選ぶ。何て幸運なんだ！」

彼は、腕を彼女の肩に回し二人は東の空を見つめていた。初めの陽の光が、夜明けの青白い光を暖かく染め始めた。紫色のパジャマと白いパジャマ。二人は、若い魅力的なカップルだった。昇ってくる太陽の光が二人の顔を照らした。全てがとても象徴的だった。しかし、もし我々がそう考えたければこの世の中で象徴的でないものは、何一つとしてない。深く美しい真理だ！

「塔に帰らなければ」と、アイヴァーがやっと言った。

「もう？」

「うん。召し使いたちがまもなく起きて、仕事を始めるよ。」

「アイヴァー…」 長く沈黙した別れがあった。

「じゃ」と、アイヴァーは言った。「もう一度、綱渡りの離れ業をしよう。」

メアリーは、彼の首に両腕を絡ませた。「駄目よ、アイヴァー。危険だわ。止めて。」彼はとうとう、彼女の懇願に屈した。「分かった」と、彼は言った。「屋敷を通って下

りて、向こうに上ろう。」

彼は、天窓からよろい戸を下ろしているため暗くなっている家の中へ姿を消した。一分後、再び向こうの塔に現われた。手を振り、それから、かがんで欄干の後ろに消えた。下の屋敷から、スズメバチのように鳴っている目覚し時計の音が聞こえた。彼は、丁度いいときに帰った。

### 注

テキストは、Aldous Huxley, *Crome Yellow* (Harmondsworth, Penguin Books, 1974) を使用。

- 1) Brantôme: Pierre de Bourdeil. 1540(?) - 1614. 作家。アンリ3世に仕え、武人としてヨーロッパ各地を転戦。回想記、年代記を残す。
- 2) Hammurabi: 紀元前18世紀ごろの Babylonia の王。最古の成文法ハンムラビ法典の制定者。
- 3) Havelock Ellis: Henry Havelock Ellis. 1859-1930. 英国の批評家、心理学者、生理学者。代表作は、*Studies in the Psychology of Sex*
- 4) Rabelais: François Rabelais. 1490-1533. フランスの風刺作家。その著書に *Gargantua* 等がある。
- 5) Chaucer: Geoffrey Chaucer. 1340-1400. 英国の詩人。 *The Canterbury Tales* の作者で英詩の父と呼ばれる。
- 6) Iron Duke: 英国の将軍 1st. Duke of Wellington (1769~1852) の渾名。
- 7) 6人の皇帝とは、以下のローマ皇帝のこと。
  - ① Julius Caesar (C. 100~44B. C.)
  - ② Augustus (63B. C. ~ A. D. 14) Julius Caesar の後継者。国政の改革を断行し学術、文芸を奨励した。在位は27B. C. ~ A. D. 14.
  - ③ Tiberius (42B. C. ~ A. D. 37) 在位は A. D. 14~37.
  - ④ Caligula (12~41) 在位は37~41.
  - ⑤ Claudius (10B. C. ~ A. D. 54) 存位は41~54.
  - ⑥ Nero (37~68)。暴君として有名。存位は、54~68.
- 8) Bourbon: ブルボン家。1589年から1792年までと、1814年から1830年までフランスを、1700年から1931年までスペインを、1735年から1806年までと1815年から1860年までナポリを支配したフランス王家。
- 9) Stephen: Stephen of Blois (1097? ~1154)。イングランド王。
- 10) Black and Tan: 1920年6月、アイルランドの反乱鎮圧に英国政府が派遣した警備隊。
- 11) Stretti: ワーガの終結部で、終止効果を高めるために導主題、答主題各声部が急速に重り合うこと。
- 12) gibbous: 半月後の月のように、天体が両端で凸（とつ）状に膨んでいる状態。
- 13) 列王紀(上)第6章18節 “And the cedar of the house within was carved with knops.
- 14) skille: 九柱戯、木製の球、円盤で9本のピンを倒す遊戯。
- 15) Tullia: (ローマ神話)。ローマ初期の最後の王 Tarquin の妻で、Servius Tullius の娘。夫に加担して父の暗殺の手助けをした。
- 16) the Napoleonic War: 1796-1815.

- 17) Norwich : イングランド東部。ノルマン人が建てた大聖堂が残っている。
- 18) Uxbridge : イングランド Middlesex 州の都市。
- 19) Slough : イングランド Berkshire 州東部の都市。
- 20) Maidenhead : イングランド Berkshire 州の都市。Thames 河畔のボート遊びの中心。
- 21) Reading : イングランド、Berkshire 州の州都。
- 22) Didcot : イングランド Berkshire 州の都市。
- 23) Swindon : イングランド Wiltshire 州の都市。
- 24) George Sand : 1804-76 フランスの女流小説家。代表作は“Indiana”。